

子育て支援プログラム活動報告

子育て支援プログラムは、人間科学研究所と心理臨床カウンセリングルームが共催している臨床活動の一つである。このプログラムは、平成十三年に開始した地域の乳幼児と保護者を対象としたグループ活動に始まり、現在では学童期まで支援の対象を広げて展開している。当初より引き続き、カウンセリングルーム相談員と大学院生であるカウンセリングルーム研修生が活動にあたっているが、さらに前年からは研究補助員として修士も加わり、研修生として培った経験や知識を生かして専門性の高い支援を提供している。本活動は、地域の親子のニードが原動力となり、立ち上がりから今日まで十年間続けられている。節目にあたる今年、偶然にも兵庫県の大学における地域子育て支援の連携を図る「ひょうご地域子育て支援大学間連絡協議会」が設立された。六月に開催された設立記念シンポジウムでは、「子育て支援をきっかけに地域と大学がつながろう」というテーマで各大学での子育て支援の実情が報告され、甲南大学人間科学研究所の子育て支援の実践と成果について紹介する機会を得た。その場で、本活動の独自性ととも「大学」で行う活動に共通の課題も示された。ここでは、現在実施してい

る「親子相談」、「うりぼうくらぶ」、「子育てサークルまつほつくり&プレイグループどんぐり」、「まつの木くらぶ」という四つの子育て支援活動についてそれぞれ報告する。

「親子相談」は、子育てにかんするどのような内容でも、親子が一緒に訪れることのできる個別相談の窓口である。相談日は毎月二回、第二・第四水曜日の午前中であるが、今年度は相談者の増加に伴い、臨時相談日を四回設けた。相談活動は、親子にそれぞれ担当者が一対一で関わりながら同室で行う。定員を一回につき三組としており、したがって複数の相互交流の場で相談をすすめている。相談後はスタッフ全体でカンファレンスを行い、内容に応じて他のグループ活動を紹介したり、心理臨床カウンセリングルームで検査を実施したりすることもある。「親子相談」では、親との相談から子どもの育ちのようすや環境を把握し、実際に子どもとかかわりながら客観的アセスメントをし、養育者への助言や子どもへの支援を行っている。今年度は、新規の相談申し込みがコンスタントにあり、また継続して利用される親子もあった。問題が顕在化しているわけではないが気になる子どもや、漠然とした心配を抱えている親の相談が多くみられ、いわゆる相談機関には足を運びにくい、しかしながら潜在的な問題をはらむ親子の「踊り場」として機能しているようである。

「うりぼうくらぶ」は、親子のふれあい体験や、他の親子と

の交流の機会を提供することを目的とした親子の遊びの教室である。活動日は毎月第二・第四火曜日の午前中で、年間二十三回開催している。プログラムは、保育士による設定遊び六十分と、スタッフがかわる自由遊び三十分の二部構成になっており、それぞれ違った体験ができて親子には好評である。参加者の大半が継続参加されるため、幅広い遊びを提供できるよう、毎年恒例の季節行事にも変化を加えるよう心がけている。参加児の年齢層は〇歳から四歳と幅があり、それぞれの発達段階での楽しみ方を提供することにも配慮している。今年も、これまで最多であった平成十五年の参加者数を上回り、開設以来もつとも多くの親子に利用された。これまでの実績に基づくプログラム内容の充実や、スタッフの丁寧なかかわりによるところが大きいのももちろんであるが、「個が尊重される集団」という乳幼児親子のニードと、「うりぼうくらぶ」が提供する支援の質が一致していることも、希望者増加の一因であろう。親、子、スタッフの三者がそれぞれに関係し合いながら、全体で全体を支える雰囲気「うりぼうくらぶ」にはあり、昨今の「孤育て」社会にあつて、「〇育て」の風土が感じられるグループである。「子育てサークルまつぽつくり&プレイグループどんぐり」は、親子がそれぞれ親グループ、子どもグループに分かれて過ごす活動で、全五回のプログラムを年間二クール実施している。一クールごとにメンバーを固定し、松尾恒子名誉教授による子

育て講話や、心理学的なグループワークを取り入れることもあり、グループ間での体験を共有しやすい。今年も第十八期、第十九期の二クール開催した。十九期では初めての試みとして、棕田美佳先生のご指導のもとアート体験に取り組んだところ、子ども主体の日常において埋没する自己の表現を楽しむ親の静かなひとときとなり、「自分のために集中して何かをすること自体、貴重」、「久しぶりに一人で熱中するすてきな時間になった」という感想が多く寄せられた。自立した一人の成人として生きてこられた親にとって、小さな集団ではあるが社会のなかで「自分自身」としての時間を得ることの意義と、得がたさとを改めて感じる機会となった。同じく人間科学研究所と心理臨床カウンセリングルームで共催しているアートグループの知見を、子育て支援活動に展開できたことはまた、大学という資源を地域に還元するという視点においても大変意義深い。今後もアートの要素を含む活動をプログラムに、取り入れていきたいと考えている。さて子どもグループ「プレイグループどんぐり」では、親と離れて過す子どもたちが会うたびに異なる姿を見せることに、スタッフは新鮮な驚きを感じながら、ともに成長していくようである。スタッフもまた、回を重ねるごとに子どもたちを見守る視点が定まり、子どもたちの世界に自然と寄り添い支えているようすがみられている。

学童期グループ「まつの木くらぶ」は、「子育てサークルま

つぼっくり&プレイグループどんぐり」卒業生のフォローアップグループとして、三年前から定期的に活動している。このグループは小学生親子を対象にしており、夏休みと冬休みを利用して年に二期開催している。今年は参加者がやや減少したものの、思春期の子どもへの対応に苦慮される親の思いや、もどかしいエネルギーに翻弄される子どもたちの姿があり、日常の親子の葛藤が垣間見られた。幼少期に育てにくさを感じていた親子も少なくはなく、半年に一回ではあるが、自身の気持ちを振り返り共有する時間のもつ意味は大きいと感じている。

今年、三月の大震災や原発事故、夏の台風という大きな災害に見舞われ、至るところ深い悲しみに覆われた。それと同時に、人と人とのつながりを実感することの多い一年でもあった。家族の大切さを感じた人の多さを象徴するように、平成二十三年を表す漢字には「絆」が選ばれた。人とのつながりは、時に支える網となったり縛る網になったりする。子育て支援プログラムでは、人を支え関係を育む「絆」とはどのようなものであるのか、それぞれに特色のある活動を通して今後も考えていきたい。

末筆ながら、今も苦しみや不安の中で過されている皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

(池内 まり)

フレンズクラブ活動報告

一、活動の目的・形態

甲南大学人間科学研究所では心理臨床カウンセリングルームとの共催で思春期発達支援事業（愛称・フレンズクラブ）を行っている。この事業は、発達障害のある子どもたちが、同年代の仲間関係を経験すること、その保護者が悩みの共有を通してエンパワーされることを目的としている。スタッフはすべて大学院生であり、スタッフが発達障害児との関わりを実習する場でもある。

本事業の対象は、小学校五年生から中学校三年生までの発達障害のある子どもとその保護者としている。診断、判定は参加条件としておらず、発達障害と同様の状態で困っている子どもも受け入れている。参加者は六組を上限とし、スタッフの人数によって受け入れ可能人数を設定する。期をまたいでの継続参加の制限はしていないので、長い場合五年間参加し続けた親子もいる。

フレンズクラブは大学の前・後期で一期ずつ開催している。一期は十回のグループ活動に、フォローアップの個別面接一回

で構成されている。他に初参加時にはインテーク（受理）面接を行っている。すべての活動が親子で一回五〇〇円である。

活動は親子分離でそれぞれがグループ活動を行うという形態をとっている。子どもグループでは、子ども一人一人にサポーターと呼ばれるスタッフが付き添い、リーダー主導のもと、仲間と協力して遊ぶ経験を積んでいる。保護者グループにはスタッフが一名加わり、参加者が子どもに前向きに関わろうという意欲が持てるよう配慮しつつファシリテートしている。

二、二〇一一年度の活動

① 第一三期 二〇一一年五月二日（水）～二〇一一年七月二〇日（水）

継続参加二組、新規参加四組で開催した。新規参加者の内一組は前年度からの待機者である。スタッフは大学院博士課程二名、修士課程二年六名、一年五名の計十三名だった。

例年通り、前期は昨年度からのスタッフが新スタッフを指導しながら活動した。スタッフ、参加者の人数が程よく、子どもに良い形で対人関係の経験を提供できたのではないだろうか。指導を受け、自分たちだけで運営し、先輩を指導する、というスタッフのサイクルを経験した修士二年の院生はこの期で引退した。

② 第一四期 二〇一一年一〇月二二日(水)～二〇一一年一二月二一日(水)

継続参加四組で開催した。スタッフが六名となり、受け入れ人数に限りがあるため、新規の参加者募集は行わなかった。

子どもグループは修士一年の院生が中心となり、博士課程の院生が補佐しつつ運営した。参加している子どもたちもグループに慣れてきており、スタッフの準備を手伝うなど、自分が主体的に関わる場という認識も生じてきたようである。

③ 研修

毎年外部から専門家においていただき、研修会を開催している。今年度は奈良教育大学の根来秀樹先生をお招きし「精神医学・脳科学からみた発達障害」と題して講演いただいた。

三、まとめ

今年度も子どもグループでは、双六、新聞ホッケー、かるた、ふれあい囲碁など、子どもたちが体と心を総合して使う遊びを考え実施してきた。子どもは体と心が連動しており、体を動かすことで、「友達に声をかけたい」という欲求を自然に表出できるようにする。そういった場面にサポーターが機敏に対応することで、子どもたちの発達に添った仲間体験が可能となつて

いるように見受けられる。

不登校で同年代の仲間との触れ合いが少ない子どもが、フレインズクラブで知り合った子どもと趣味の話をするために、保護者に「〇〇君、どんなゲームしているか聞いておいて」と頼んだと聞いた。直接の関わりが可能となるまでには時間がかかるだろうが、こういった子どものちよつとした変化を、対人関係の展開につながる萌芽と受け止め、大切に育てていきたい。

保護者グループでは、第十三期は自由におしゃべりする中で、子どもの言動への対応をアドヴァイスし合った。参加者は子育てのストレスを吐き出し、共感し合うことで、直接の解決には至らなくても、子どもと向き合うエネルギーを得ているようだった。

第一四期は隔週のペースでペアレントトレーニングを導入した。保護者は「子どもの良い行動に注目することで、子どもは何がよい行動なのかがわかる」と、頭では理解していても、日頃はずいつい、よくない行動に注目して指導、指示してしまいがちである。段階を追って学び、家庭で実践することを通して、頭の理解と行動が一致する。そして参加者は「ああ、また怒ってしまった」という後悔の多い子育てから脱し、子どもができるようになったことを共に喜び、子どもの自信につながる楽しい子育てに自ら変化していく力を持つていると実感していかれ

四、今後の展望

フレンズクラブは第一三期で丸六年が経過した。六年の実践を通じて、フレンズクラブは思春期の子どもにとって公園デビューの体験であるとの思いを強くしている。

幼児期の公園デビューでは、子どもは特定の養育者に付き添われて、少しずつ仲間の輪に入り、不安や恐怖が生じれば養育者のもとに逃げ込み、慰められ、適切な関わり方を教えられ、また、仲間の中に入って行く。発達障害のある子どもは、思春期になってようやく、養育者に甘えながら仲間との遊びを体験することへの内的準備が整うが、その一方で、親への反抗、自分は一前だという意識は年齢相応に発達してくる。そのため、彼らが親に付き添われて公園デビューをすることは難しい。

親、特に母親は、幼児期に甘えを見せなかった子どもが思春期になって形を変えて甘えを表現したり、あるいは、その時期になってようやく幼い形で甘えたりする状態に適切に対応できず、時に過剰に甘やかしたり、時に突き放し過ぎたりしがちである。

フレンズクラブでは、親の代わりとなるほどよい見守り手としてサポーターが機能することで、子どもたちが無理のない公園デビュー体験をしているように思われる。サポーターは子ども

もにとっては、見守り、教え、時には大人ぶりたい時の対等の相手であり、保護者にとっては自分の代わりに子どもを見守ってくれる人である。サポーターを媒介として親子が、象徴的公園デビューをしているというフレンズクラブの場の意味が実践の中で明確になってきたと感じている。

来年度は、このような活動全体の構造をスタッフ全員が理解し、より合目的に活動していきたいと考えている。

(南野 美穂)

二〇一一年度アートグループ活動報告

今年で十一年目を迎えるアートグループは、例年どおり第二・第四木曜日の午後・前期・後期とも八回ずつ、計十二回開催された。ファシリテーターの筆者と講師の椋田三佳氏とが共同で運営するグループ活動で、一回ごとに異なる課題に基づいてアート制作を行う。今年も長年継続参加しているメンバーに加え、新規に一名メンバーが増え、グループを長らく休んでいたメンバーが、一度顔を出されることもあった。見学にも数名来られた。以下に、今年の活動で特徴のあった点をいくつかまとめて報告する。

一、新しい課題の取り入れ

① 多面体おりがみ

一般的に使われるものよりしっかりした紙質の折り紙（色紙・和紙）を使って、多面体を制作する課題を行った。折り方に精度が求められるので全員時間をかけ集中して折り続け、メンバーから「疲れた」という声がかかるほどだった。筆者は個人制作として正十二面体を色紙と和紙を混ぜて作ってみた。十二枚



すべて違う色と模様を選んで同じ形のパーツに折り、組み合わせさせたのだが、きちんと折れたときのすっきりとした満足感と、出来上がりが想像できるようできない難しさが印象に残った。参考にした文献の副題に「考える頭をつくらう！」と書いてあるとおり、普段の生活とは異なる頭の使い方をしたようで、一見創造性に欠けるこのような試みも面白いと感じた。個人制作に加えて、各自で「レンガ」を作った最後と一緒に並べてもみた。一人でたくさん作ることはできなくても共同で積み上げれば予想外の形ができて面白い。グループワークの醍醐味であろう。

② キャンドル

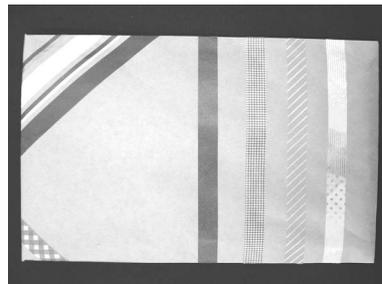
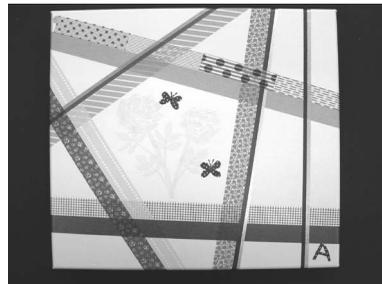
パラフィン湯煎で溶かし、染料（専用の物以外にクレパスを削った物を使用）を入れてかき混ぜ型に流し込んでミニ・キャンドルを作った。家庭用卓上コンロとはいえ、ガスの火を用いて蠟を溶かし固めるのはワクワク感のある作業だったようで、メンバーの一人は「久しぶりに興奮しました」と喜んでコメント



トしてくれた。アロマ素材としてポプリや香り付きの染料を蠟に混ぜることで芳香を楽しむこともできた。アート制作は五感を刺激し活性化する上で意義のある行為だが、嗅覚に訴える課題というのは少ないので、その点でもよい課題だったと思う。

③ マスキングテープ

最近、文房具や手芸の店できれいな色や模様のマスキングテープを見かけることが多くなった。グループでも流行の素材を使ってみようということになり、空き箱やクラフト紙の封筒などに装飾を施す方法が案として提示された。こう書くと「誰でもできる手軽な工作」という印象だが、一つの箱や封筒のどこにど



う貼るかという位置取りの問題、柄と柄を組み合わせたリ何かの形にカットしたりというデザインの問題があり、その辺りに制作者の個性が反映する。メンバーの作品には、普段の描画と同じ趣ながらマスキングテープという素材の特性をうまく生かして大判の封筒にコラーージュを施したものがあった。「こんな封筒で本を贈ったりしたら素敵ですね」と筆者はコメントした。実際に使用するかどうかは別として、ギフトボックスや封筒をデザインすることによってコミュニケーションが想像できるのも意味のあることであろう。

二、広報について

↳アートセラピー・ワークショップ開催

ここ数年、アートグループの活動上問題になっているのは新規メンバーが増えないことである。見学者はあっても、メンバーになって参加するに至らないケースが多く、カウンセリಂಗームにおいてアートグループやアートセラピーを行っていることを地域の人に知って頂く機会を増やしていく必要があった。今年三月に椋田さんを講師に招いて、K I H S主催のアートセラピー・ワークショップ『認知症ケアのためのアート2 和紙を使ったアートセラピーの実践』、一月には四天王寺大学の今井真理先生にお願いして『認知症ケアのためのアート3 アート回想法の体験型ワークショップ』を行い、アートセラピーに関心のある専門家・市民に向けて行った。アートグループそのものを宣伝するのではなく、このようなワークショップに参加して下さる方と直接話し、当ルームでの活動を紹介することで地道に宣伝していく方略である。今年には社会復帰後長く参加を休まれているメンバーの一人が「久しぶりにアートをしたいメンバーが一名増えたりと前進があったので、今後も粘り強く活動を展開していきたいと考えている。

(内藤あかね)

園芸療法活動報告

学生相談室では、二〇〇〇年度より、人間科学研究所との共同研究事業として、園芸療法に関する二種類の活動を行っている。一つは、学生相談室で毎週金曜日の午後学生向けに開催している「Re・アワー」のプログラムの一環として実施する活動、もう一つは、学外から専門の講師を招き、一般公開の「園芸療法研修会」を開催することである。後者の方は、講師との日程調整がうまくできずに、今年も残念ながら開催できなかった。研修会は、日々の活動を振り返り、新しいアイデアや工夫点を取り入れることのできる機会となる。今後の開催に近づけるよう努力していきたい。

今年の「Re・アワー」では、園芸療法プログラムを前期後期合わせて四回実施した。内容は、鉢の寄せ植え（五月、十月）、サツマイモの苗植えと収穫（六月、十一月）である。

五月に、「春のガーデンング」と銘打って、植木鉢に季節の草花の寄せ植えを行った。このセッションは、自然に触れる体験の入門編となり、参加者が土の感触や草花の香りを直に味わうことができる。また、仕上がった植木鉢は、学生相談室内やエントランスに飾られ、他の相談室来室者に季節を感じてもら

うことができる。今年も赤や紫や黄色といった春ならではの色彩豊かな花々を、相談室利用者やスタッフ皆で楽しむことができた。寄せ植えでは、生きている植物を扱うため、完成した植木鉢の中は、日々成長し変化していく。携わった参加者が、来室時にその成長過程を鑑賞できることも、寄せ植えの得がたい特性の一つであると考えられる。

十月には、前の週に作ったエコポットにグリーンを寄せ植えた。エコポットとは、「漆喰を素材にし、粘土細工のようにこねて形を作り、自然乾燥させて出来上がり」という焼かない植木鉢のことである。時がたてば漆喰は土に返りゴミにならないという「エコ」である点だが、名前の由来である。いざ作ってみると、漆喰を形成するのがかなり難しく、鉢の仕上がりは、思ったより小さいものとなった。そのため、寄せ植え用に高さのある植物や花を選択できず、一つの鉢に小ぶりの観葉植物を一種類だけ植えることになった。数種類の植物の寄せ植えはできなかつたが、参加者にとつて、手作りの世界で一つだけの自分だけの鉢は、愛着のあるものとなったようで、各々、気に入った植物を楽しそうに選ぶ姿が見られた。次回は、苔なども加えてポリウムのあるものに仕上げてみたい。

六月に園芸療法スペースの畑にサツマイモの苗を植えた。土作りと畝作りから始めるのだが、耕すという行為は、学生達にとつては非日常のものである。汗をかき、ふだん使わない筋肉

を酷使し、かなりの重労働に感じるようだ。服や靴に汚れがついてしまうのも敬遠される。そのせいか、他のプログラムと比べ、参加人数はここ数年増えていない。生命をはぐくむ土に直接触れる行為は、園芸療法の醍醐味を味わえ、体験から得ることも多い機会なのに、非常に残念である。しかし、十一月にはダンボール箱いっぱいのおやつが収穫できた。収穫した日にはサツマイモごはんを試食し、二週間後に収穫したサツマイモ餅（おやき）を調理した。おやきは、初めて挑戦した料理であったが、調理過程が簡易で、サツマイモそのものの味を堪能できた。生地を、うさぎや魚、ハートなど好みの形に形成してホットプレートで焼く過程もあり、参加者は楽しそうに取り組んでいた。春の苗植えと秋の収穫の両方に参加する学生は少なく、継続して世話することもないため、苗の成長過程を順を追って見ることはないが、断片的であっても植物の一生の節目節目に立ち会う体験は、学生の心の成長にもよい影響を及ぼすと考えられる。

今年度も、春の寄せ植えから秋の収穫、そして調理・試食まで、季節の変化を感じ、味覚、触覚、臭覚など五感を刺激される体験として、園芸療法を実施できたが、参加者が一〜二名と少なく、〇名のときもあった。しかし、対人関係が苦手な学生同士が集い、植物や土の中の生き物を介してゆっくりしたペースで相手に心を開いていくさまを見ていると、植物の持つ成長

力、治癒力と共に集団の持つ相互作用を実感することが多い。今後もぜひとも継続していきたい活動であるが、活動の準備、継続にかかるスタッフの負担の大きさ、参加人数の少なさなど、工夫すべき課題は多い。また、植木の根がはびこり、利用できぬ畑が半減していること、散水機が故障し夏休み中の水やりをどうしていくかなど、今後の園芸療法スペースのメンテナンスの問題もある。緑豊かな相談室を維持していくことや、学生に自然に触れる体験を提供していくことの必要性は、学生の反応からも日々実感することは多い。いかに学生にアプローチできるかを考えながら、実践を重ねていきたい。

（渡里 千賀）